

知床生態保護研修報告

一、斜里高校との交流（研修3日目午前）

研修3日目の午前中、私たちは斜里高校を訪れ、地元の高校生たちと交流を行った。斜里高校の生徒たちは知床をテーマにプレゼンテーションを行い、地元の観光業や漁業について紹介してくれた。その後、私たちも世界自然遺産に関する内容について説明した。彼らの故郷に対する理解の深さには大変感銘を受けた。それぞれ異なる地域から来ているが、自然保護への関心と初心は共通していることを実感した。

その後、複数の学校の生徒たちと共にグループワークに参加した。私たちのグループに割り当てられたテーマは「食を核とした旅行プランの設計」で、ターゲット層は20代のアウトドア活動にあまり興味のない外国人観光客に設定された。当初、私たちはこの課題には一定の矛盾があると感じた。なぜなら、知床を訪れる人のほとんどは、アウトドアの自然体験を目的としているからだ。しかし、議論を深めた結果、アウトドア活動が好きでなくても、地元の海産物を味わったり、漁師料理を体験したり、伝統的な食材加工技術について学んだりすることで、観光客は知床の地域文化を深く感じる事ができると気づいた。同時に、近年の知床の変化について地元の生徒たちの見解も尋ねた。例えば、サケの減産の原因をどう見るか、なぜコンブを養殖するのか、養殖コンブと天然コンブの違いは何か、といった質問である。地元の生徒たちとの交流を通じて、これまで知らなかった情報を得ることができた。例えば、彼らはサケの減産は地球温暖化だけでなく密漁とも関係があると考えていること、釣り竿の許可本数は最大で3本であることなど、様々な情報を教えてくれた。異なる背景を持つ生徒たちが一緒にブレインストーミングを行い、多くの新しいアイデアが生まれた。

このワークショップは、世界自然遺産である知床を見る視点を豊かにしてくれた。若者として、また地元住民として、地域の環境保護やエコリズムをどのように捉えているかを知る機会を得た。これは非常に重要な部分だと考える。なぜなら、持続可能な都市発展には地元住民の参加が不可欠であり、同時にこれはコミュニティのアイデンティティに関する啓発教育、人材の育成・定着・誘致にも関わるからである。



二、知床財団の訪問（3日目午後）

午後、知床財団を訪問し、秋葉さんから財団の日常業務について詳しく説明を受けた。担当者は主に自然生態系のバランス調整と自然保護区の運営管理を担当しており、知床に生息するシカの生存状況、および生態系バランスを維持するために実施している捕獲管理業務の詳細について丁寧に説明していただいた。また、ヒグマ管理の全体状況と主要な課題についても言及された。

（一）財団の主な業務

財団の主な業務は以下の通りである。生態保護においては、様々な施策を通じて総合的に管理と回復を推進している。例えば、「100平方メートル運動」を展開し、長期的な土地保護を基盤として森林を徐々に原生の姿に回復させている。また、観光客管理においては、知床五湖などの主要観光地で現場管理と車両誘導を実施し、完備された監視システムを構築することで、観光客の活動が自然環境に与える影響を軽減している。同時に、野生動物管理においては、担当者が公園区域を定期的にパトロールし、ヒグマやシカなどの野生動物の活動痕跡を速やかに発見するとともに、防熊ゴミ箱の設置、野生動物を誘引しやすい食物残渣の定期的な清掃、電気柵の設置と日常的な維持管理などを通じて、人と野生動物の隔離と安全対策を強化している。



（二）シカの科学的管理

秋葉さんはシカの個体群管理の問題について重点的に説明された。知床ではシカの数が増えすぎ、モニタリングデータによればシカの個体数はなお若

干増加傾向にあり、すでに植生に被害を与えているため、科学的な捕獲管理を実施する必要がある。秋葉氏は、「シカの数減らす」という言葉をよく耳にするが、実際には数を減らすこと自体が目的ではなく、管理を通じて自然生態系や植生への影響を評価することが重要であるため、「モニタリング評価」と「捕獲調整」が極めて重要であると述べた。たとえ莫大な費用がかかったとしても、科学研究と同様に、自然条件は常に変化しているものの、行動の根拠はデータに基づく必要があり、データ収集は決して欠かすことができないという。このことから、生態保護とは特定の動物だけを保護することではなく、生態系全体のバランスと安定を維持することであるということに改めて深く認識させられた。

私たちが大きな衝撃を受けたのは、シカの捕獲管理には極めて精緻な作業規範があることである。繁殖を根本から抑制するため、捕獲対象は主にメスシカとされる。シカは群れで生活する動物であり、群れの中で直接射撃すると、他のシカが強い恐怖心を抱き、高度に警戒するようになり、いわゆる「学習したシカ」となってしまう。そのため、作業員はまずシカの群れを小集団に分割し、専用車両や雪壁を利用して隔離し、小範囲内でシカの頸部または頭部を狙って射撃し、瞬時に苦痛なく死亡させることを確実にする。後方の回収チームは直ちに血痕などの痕跡をすべて清掃・運搬し、他のシカが危険信号を識別するのを防ぐ。同時に小口径ライフルを使用し、銃声と振動を最大限に低減し、周辺のシカの群れへの影響を軽減する。すべての作業の詳細には科学的根拠があり、これは単純な狩猟行為ではなく、専門的で厳格な生態管理業務である。しかし、それでもシカの警戒心は徐々に高まっていくため、長期的に目標値を維持することは依然として非常に困難である。

（三）核心的な管理理念

日本の国立公園および自然保護区の管理は、2つの核心的な理念を掲げており、秋葉さんが紹介されたこれらの理念は私たちに特に深い印象を残した。

1. 協働管理 (Collaborative Management / Co-management)

日本では、地域コミュニティ、地元住民、地方自治体、中央政府、民間機関など多様な主体が公園管理に共同で参加し、協働統治の管理体系を構築している。この方式は調整段階で時間を要し、ある程度意思決定の効率に影響を与えるものの、独自の利点も有しており、国家中央主導の強力な保護方式と相互補完的な関係にある。簡単に言えば、政府が単独で意思決定するのではなく、多様な主体が共同で参加することで、効率は高くないものの、意思決定がより実態に即し、より合理的なものとなるということである。

2. 適応型管理 (Adaptive Management)

最初から固定的なルールを定めるのではなく、継続的なモニタリングデータに基づき、実践過程において絶えず調整・改善を行いながら対応策を完成させていく手法である。知床におけるシカ個体群に対する捕獲方法、捕獲時期、捕獲対象の詳細な設定は、まさに順応的管理の典型的な事例である。すなわち、実際の状況に応じて管理戦略を動的に調整し、実践の中で方策を最適化していく。知床におけるシカの捕獲管理手法は、まさにこうした継続的な改善・最適化の成果である。

秋葉さんの説明を受け、私たちは知床財団のこれほど強大な調整力に驚かされた。複数のステークホルダー間で協働体制を構築することは容易ではなく、立場の違いや自然に対する考え方の相違が対立を生む可能性もある。上述の2つの管理理念は、まさに地方と国家、行政と民間の間でどのように橋渡し役を果たすかという問いに対する答えである。

三、環境省の訪問（3日目午後）

その後、環境省のオフィスを訪問し、伊藤さんと二神さんから環境省の関連業務について説明を受けた。特に知床におけるヒグマ管理の現状、実際の課題および対応策について詳しく説明していただくとともに、環境省が生態保護において担う全体的な職責についても述べられた。

職員の方から、標高や気候などの自然条件の影響により、知床は日本国内でヒグマの生息数が多い地域であり、ヒグマ管理が地域の生態保護における重点かつ難題となっていると伺った。現在、ヒグマ管理は多重的な矛盾に直面している。ヒグマの出没頻度は増加し続けており、関連する人身事故の報道も時折見られ、それが直接的に観光客数の減少を招いている。その一方で、一部の観光客は好奇心から危険を冒し、「ヒグマは人を襲わない」という安易な考えを持ってヒグマに近づこうとするが、こうした行為はかえってヒグマの襲撃事件を引き起こしやすい。職員の方はまた、「ヒグマは知床の重要な観光資源の一つである」とも述べられた。この言葉は我々に、ヒグマの保護、観光客の安全確保、地域の観光業発展の間でバランスをどのように取るかという、知床のヒグマ管理において早急に解決すべき中心的課題について考えさせられた。

我々は職員の方に質問した。地球温暖化により、ヒグマの冬眠開始時期が遅れ、採餌のために人間の活動区域に入る回数が増え、それがヒグマの目撃件数の頻発につながっているのではないかと。職員の方はこれを肯定し、温暖化により確かにヒグマはより長い時間採餌のために外出する必要があり、冬眠時期が遅れ、人間の活動区域に入る頻度が大幅に上昇していると説明された。一部の観光客はヒグマを觀賞するために訪れているものの、この現象により地域の人身安全リスクが大幅に高まっているとのことであった。

環境省の中核業務はまさにこれらの課題を中心に展開されている。ヒグマの個体群数と行動パターンを監視し、気候変動が地域の生態系および野生動物に与える影響を詳しく研究し、講座や啓発活動などの様々な方法で観光客にヒグマへの正しい対処法を普及させるとともに、知床財団、地方自治体、地域住民など各主体との連携調整を行い、協力してヒグマおよび全体的な生態保護業務を推進している。このことから、気候変動は抽象的な概念ではなく、ヒグマの冬眠習性、地域の観光産業の発展、住民の日常生活の安全に実際に影響を与えているということ、我々は初めて実感することができた。



四、考察と成果

今回の研修活動を通じて、我々グループメンバーは以下のことを深く認識した。

(1) **生態保護には科学的な裏付けが必要である。** シカの捕獲管理の各細部は科学的に設計されており、環境保護は情熱だけでは不十分で、専門的な知識と厳密な方法論が必要であることを理解した。

(2) **生態保護には多方面のバランスを取る必要がある。** ヒグマの知床における位置づけは非常に多元的であり、重点的に保護すべき野生動物であると同時に、地域特有の観光資源でもあり、また一定の安全上のリスクも存在する。生態保護に標準的な答えはなく、様々な矛盾の中で最適なバランス点を見つけるしかない。

(3) **必要な科学的介入が保護の鍵である。** 生態保護は自然の成り行きに任せることなく、シカの個体数が過剰となり植生を破壊したり、ヒグマの活動が人間の生活に影響を与えたりする場合、科学的な人為的介入は生態系バランスを維持するための必要な手段である。

(4) **生態保護には多方面の分業と協力が必要である。** 財団は現場管理と実務を担当し、環境省は政策研究、生態モニタリング、各主体間の調整に重点を置いており、それぞれが役割を分担し責任を果たすことで、保護区の管理業務を効率的に推進することができる。

(5) **普及教育は生態保護の重要な一環である。** 多くの人間と野生動物の衝突や安全問題の根源は、野生動物に対する理解不足にある。講座や啓発活動などの方法で正しい知識を普及させることで、観光客が野生動物への対処法を習得し、根本から安全リスクを軽減することができる。

五、おわりに

当日の一連の訪問と交流を通じて、我々は多くのことを学んだ。知床における生態保護と野生動物管理のきめ細かな取り組みを理解しただけでなく、日本の自然保護区の管理理念と現在直面している実際の課題についても深く理解することができた。

財団では、秋葉さんによるシカ管理の詳細な説明から、生態保護に携わる方々の専門性と厳格さを感じ取ることができた。環境省では、伊藤さんと二神さんによるヒグマ管理の紹介から、人と自然の共生の難しさを実感した。斜里高校では、地元の生徒たちとの交流を通じて、若者の故郷への愛と自然保護への熱意を目の当たりにした。

これは非常に価値のある一日であり、人と自然の共存のあり方について新たな考察を得るとともに、多くの示唆を得ることができた。知床での研修経験は、我々に生態保護に関する専門知識だけでなく、自然に対する姿勢を教えてくれた。それは、科学的精神を持ち、動的バランスを追求し、学び続ける心を保ち、多様な主体との協働を推進することである。帰郷後、我々は身の回りの環境問題を新たな視点で捉え、自然保護の実践にもより積極的に参加していきたい。

謝辞

斜里高校の生徒の皆様、知床財団の秋葉様、環境省の伊藤様と二神様、そして研修にご参加いただいた先生方と同行の皆様にご心より感謝申し上げます。